

# イギリス縁辺農村における

## 地域コミュニティの変容にともなう観光地化

### —ウェールズ・ガワー半島・スランマドック村の事例—

#### Community Mixing and Rural Community Changes in the Gower Peninsula, Wales

菊地 俊夫\*・飯塚 遼\*\*・山本 充\*\*\*

Toshio Kikuchi Ryo Iizuka Mitsuru Yamamoto

#### 摘 要

本研究は、ウェールズ・ガワー半島を事例にして、イギリス農村地域の混住化にともなう農村社会の変容を明らかにするとともに、新住民と旧住民との衝突や対立（コンフリクト）を和らげたり解消したりする手段としてのコミュニティビジネスの役割を検討した。農村における混住化は、旧住民と新住民との間に対立や隔絶などの構造をうみだし、地域コミュニティの二分化や崩壊につながる場合が少なくない。スランマドック村の事例で示したように、新住民と旧住民が協働するコミュニティビジネスの存在は、2つのコミュニティの繋ぎ手として機能し、デプライベーションを軽減させている。また、コミュニティビジネスは新住民と旧住民のコミュニティの社会階層やライフスタイル、および文化属性や居住景観を融合させるだけでなく、「住んでよし、来てよし」の村づくりに貢献し、村の観光地化の中核的機関となっている。

#### I. はじめに

イギリスにおいて、農村回帰の風潮は1960年代から始まり、そのような現象はcounter-urbanisation (Berry 1976, Brown and Wardwell 1980) や rural gentrification (Pacione 1984, Phillips 1993)、およびrural idyll (Little and Austin 1996, Matthews et al 2000) として捉えられてきた。それらの研究で問題とされてきたことの1つに、新住民の農村流入にともなう、旧住民との衝突や対立があげられている (Cloke and Thrift 1987, Cloke and Little 1990)。農村への新住民の流入は、Clokeら(1998)が指摘しているように、新たな社会階層を創出し、既存の社会階層との対立や隔離、あるいは共生や共存などの形態をルーラリティやライフスタイルとの相互関係のなかでつくりだしてきた。そこで、本研究の目的は、イギリスの農村地域における人口流入の現状を俯

瞰し、新住民と旧住民との混住化にともなう農村社会の変容を明らかにすることを主眼とした。加えて、本研究は新住民と旧住民との衝突や対立(コンフリクト)を和らげる、あるいは解消する手段としてのコミュニティビジネスの役割について検討することを第二の目的とした。

本研究が対象とするガワー半島の Swansea Bay は、M4 高速道路の終点に位置し、その交通の至便性に基づいてハイテク関連産業の進出が著しい。このような経済発展とも相まって、M4 沿線で就業する人びとが農村生活に憧れ、農村らしさ(ルーラリティ)を求めてガワー半島の農村に流入する傾向を強くしている。本研究のフレームワークは、Bourdieu (1984) の社会階級と文化の関係性の議論を下敷きにしている。つまり、新しい文化がどのような社会階層によってもたらされ、その社会階層の属性によって対立・隔離や共生・共存の構造が変わってくる。従来の研究は、支配階級よりもプッチ・ブルジョワ階級のほうが、混住化社会においてより共生・共存しやすいことを明らかにしたが、共生・共存の仕組みについて、あるいはそのエポックメーカーな契機や鍵となる地域的な条件についての

\*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1  
e-mail kikuchan@tmu.ac.jp

\*\*秀明大学観光ビジネス学部  
〒276-0003 千葉県八千代市大学町 1-1  
e-mail iizuka-r@mailing.shumei-u.ac.jp

\*\*\*専修大学文学部環境地理学科  
〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1  
e-mail yamamotom@isc.senshu-u.ac.jp

議論は不十分であった。

一方、Klaus (1993) は文化学的な視点から混住化した農村地域の社会階層について考察し、文化が異なる社会階層間の単なる紐帯として存在しているのではなく、むしろそれらを交流させる介在者として存在していることを明らかにした。この議論も Bourdieu (1984) のフレームワークに基づくものである。そこで、本研究では、農村地域に存在する社会階層のつなぎ手や介在者としてのコミュニティビジネスに着目する。コミュニティビジネスは新住民がもたらした新しい文化であり、その文化に対して受容するかしないかの選択が新住民と旧住民との社会階層の属性を反映することになる。そして、そこには混住化した農村と都市との地理的関係性も反映されることになる。

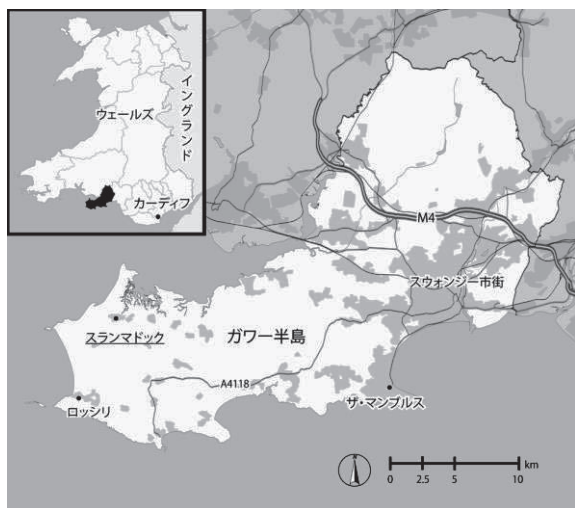


図1 研究対象地域のガワー半島とスランマドック村

## II. ウェールズ・ガワー半島とその農村の概要

ウェールズは、連合王国イギリスを構成する国の1つであり、グレートブリテン島南西部に位置している。ウェールズの公用語は、英語に加えて、ケルト諸語に属するウェールズ語である。2011年のセンサス<sup>3)</sup>によれば、ウェールズの3歳以上人口の30%がウェールズ語を話し、人口の3分の2がウェールズに帰属意識をもっている。このことは、ウェールズ語の話者としての旧住民と、ウェールズ語を話せない新住民との対立や隔絶が文化的にみられる地域であり、そのことが混住化社会の問題の基盤になっていることを示している。とりわけ、ガワー半島は交通の至便性に基づいてイングランドからの流入者が多く、農村における混住化が典型的にみられる地域でもある。

ガワー半島はウェールズの南部に位置し、ビクトリア朝以来の景勝地として知られており、1956年には Area of Outstanding Natural Beauty に指定された。今日

では、半島の土地の10%強が Special Protection Areas (SPAs) やラムサール条約などの指定を受けており、さらに土地の30%が地域の自然保護地域などに指定されている。このように、ガワー半島は、きわめて良好な自然環境や景観を有しており、それらの資源が新住民の流入の動機づけになっている。

半島の付け根にあたる地域には、カーディフに続くウェールズ第2の都市スウォンジーが立地している。スウォンジーは、南ウェールズ炭田の西端に位置し、ウェールズにおいて最も早くに工業化を進めた都市でもある。その後、銅鉱山が近いこともあり、スウォンジーは19世紀には銅精錬の中心となった。現在では鉱業が衰退するものの、臨海部の再開発とM4高速道路を基盤にして、ハイテク産業が集積し、スウォンジーは新たな工業の中心になっている。ガワー半島は、行政上、スウォンジー市街を含むスウォンジー市郡 city & county に属している。スウォンジー市郡のホームページ<sup>2)</sup>によると、スウォンジー市郡の66%が農村地域であり、34%が都市地域である。スウォンジー市郡の人口は、2013年現在、240,300人を数えているが、その多くは都市地域に居住している。

ガワー半島の主要部は、スウォンジーの都市地域近郊の農村地域に当たり、伝統的な牧羊業とともに、野菜生産を中心とする近郊農業が盛んである。そして、ガワー半島の農村はスウォンジー市街に居住する都市通勤者にとって、あこがれの居住地にもなっている。これは、魅力的な自然環境や景観の存在とともに、スウォンジーへの近接性の高さが背景にある。したがって、セカンドハウス（週末型別荘）の増加や高齢者の流入がガワー半島の農村地域で多くみられ、混住化が進展している。ちなみに、スウォンジー市郡以外のイングランドやウェールズに主な居住地を有するもので、スウォンジー市郡に第2の居住地をもつものは6,146人であり、スウォンジー市郡の通常人口に対するその比率は、ウェールズ全体のそれより高くなっている（2011年センサス）。また、この6,146人のうちの20%弱が休暇目的でスウォンジー市郡に第2の居住地を有しており、ガワー半島が一時的な居住地として選択されていることがみてとれる。

本研究の調査対象であるスランマドック村は、ガワー半島の北西部、スランマドック丘陵の北麓に位置し、Cwn Ivy (スワン・アイビー) から Llangennith (スランゲニス) に至る古代からの道路上に沿って家屋が列状に立地する。2011年現在、人口は882人、世帯数は344戸である。センサスによると2001年から2011年

にかけて、サービスクラスの占める比率は、34.8%から48.8%と大幅に増加しているのに対して、ワーキングクラスは15.4%から17.2%と微増に留まる。このことは、サービスクラスに代表される都市住民が農村に多く流入していることを示している。

### Ⅲ. ガワー半島の混住化の動向と地域への影響

ガワー半島の混住化の動向を明らかにするため、国勢調査のデータに基づいて、農村における流入人口の割合を分布図に示した(図2)。これによれば、人口流入の割合はガワー半島の東部と西部、および南部で5%以上と高いことがわかる。特に、東部ではスウォン

ジー市街地への高い近接性により、人口に占める流入人口の割合は10%以上と高い。この傾向は2001年においても継続し、それは近郊農村への居住が一般化していることを物語っている。同様に、西部や南部も流入人口の割合が5%以上と高い。これは、良好な自然環境や景観に基づく地域の魅力が吸引力となっており、ガワー半島の景勝地を中心にして、流入人口の割合が10%以上になっている地域も少なくない。他方、人口流入の割合の低い地域が半島の中部や北部に展開している。これらの地域は山間地や干潟・湿地帯であり、良好な自然環境や景観を有しているが、インフラストラクチャーの整備や開発が遅れている。したがって、

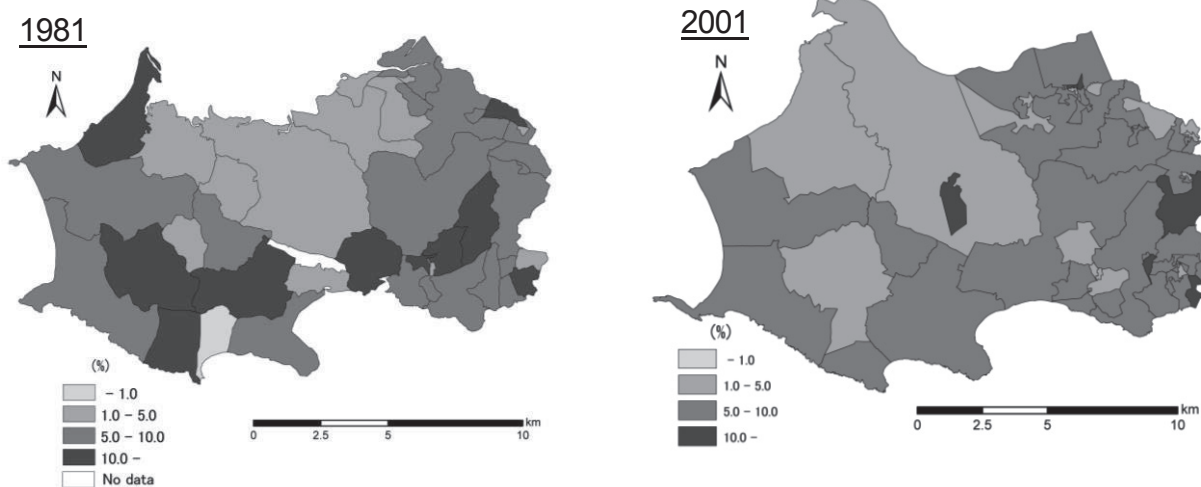


図2 ガワー半島における人口に占める流入者の割合(1981年と2001年)

注) 1981年と2001年との地域の形が異なるのは、干潟部における計測時の干満の差によるものである。

(Office of Population Censuses and Surveys, 1981 Census, Office for National Statistics, 2001 Census より作成)

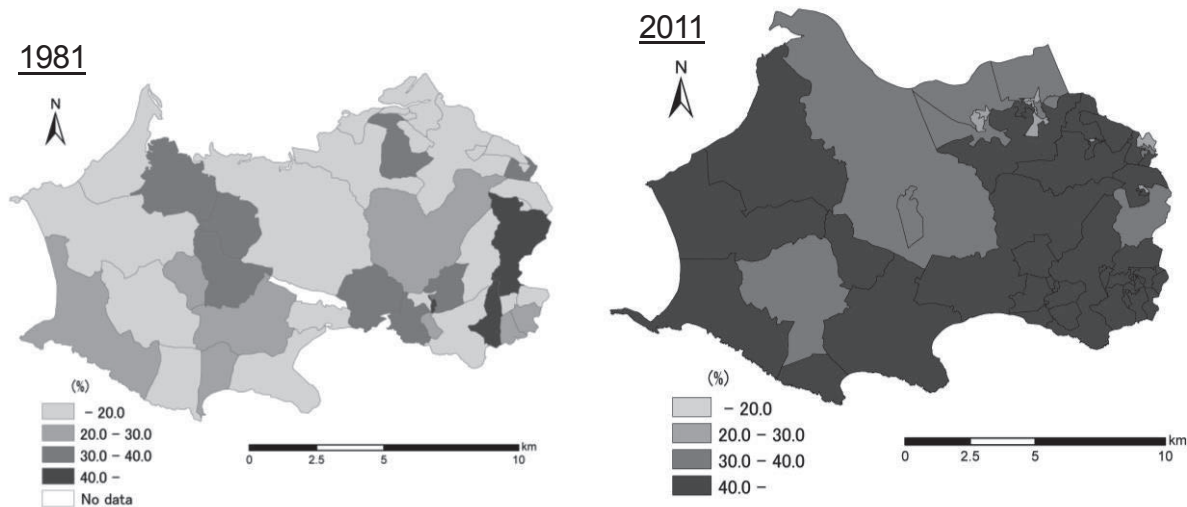


図3 ガワー半島における人口に占めるサービスクラスの割合(1981年と2011年)

(Office of Population Censuses and Surveys, 1981 Census, Office for National Statistics, 2011 Census より作成)



セカンドハウスの開発や農村居住も低調である。

ガワー半島の混住化の社会的様相を明らかにするため、人口に占めるサービスクラスの割合の分布図を示した(図3)。サービスクラスは管理職や専門職など高度な都市的産業に従事する人びとであり、この地域の伝統的な農業や牧畜業の従事者は異なる社会階層に属している。1981年のサービスクラスの分布パターンでは、サービスクラスの占める割合は全体として20%以下と低い。このことから、ガワー半島が伝統的な農村地域としての性格を強くしていることがわかる。しかし、スウォンジーの近郊ではサービスクラスの人口の割合が高くなりつつあり、その傾向は次第に周辺に広がっている。その結果、2011年の分布図に示されるように、サービスクラスの人口の割合はほぼ全域で30%以上になっている。なかでも、サービスクラスの人口が40%以上の地域は流入人口の高い地域とも一致している。つまり、サービスクラス人口の流入が農村の混住化の重要な営力になるといえる。

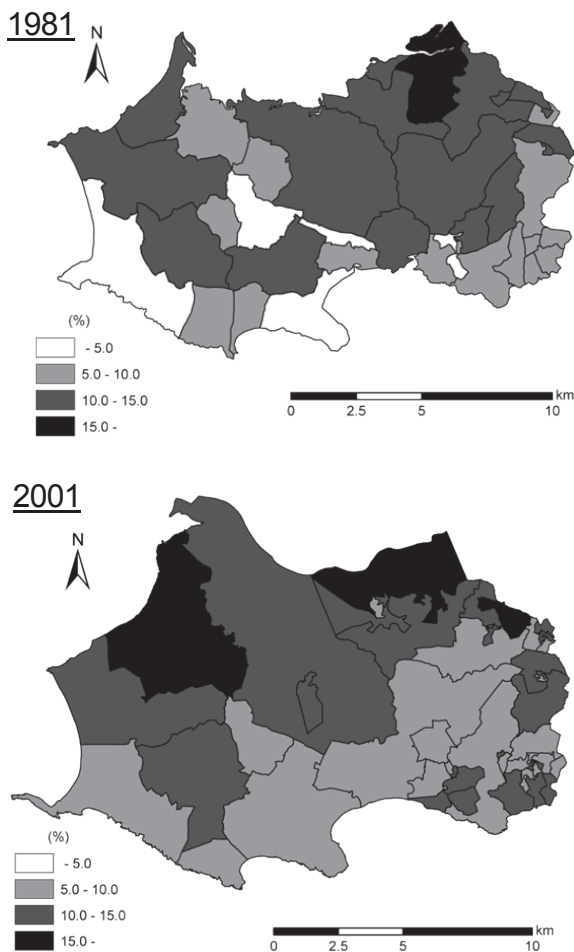


図4 ガワー半島における人口に占めるウェールズ語話者の割合(1981年と2001年)

(Office of Population Censuses and Surveys, 1981 Census, Office for National Statistics, 2001 Census より作成)

次に、ガワー半島における混住化の文化的様相を明らかにするため、人口に占めるウェールズ語話者の割合を分布に示した(図4)。ウェールズ語はウェールズにおいてかつて日常的に用いられていた言語の1つであり、ウェールズの文化的アイデンティティを示すものでもある。現在でも、道路標識や案内板は英語とウェールズ語が併記されている。図4によれば、1981年におけるウェールズ語話者の人口に占める割合は全体的に高く、ウェールズの文化的属性が残存していた。2001年におけるウェールズ語話者の人口に占める割合においても高い割合を示している地域が多い。これは、ウェールズにおけるウェールズ語教育の成果を反映している。その一方で、ウェールズ語話者の旧住民とウェールズ語非話者の新住民(主にイングランドからの流入人口)との文化的な隔絶や対立が目立つようになり、農村の混住化にともなう諸問題の根源にもなっている。

以上に述べてきたように、ガワー半島の農村における混住化は、進展する南部とあまり進まない北部とに地域分化している。これは、干潟・湿地帯が広く展開する地形的な条件と、良好な自然環境や景観に基づくレクリエーション活動へのアクセスのしやすさなどを反映している。他方、社会階層の観点で農村の混住化をみると、サービスクラスの居住が良好な自然環境や景観に基づいて、ガワー半島全体で増加する傾向にあることも事実である。しかし、ウェールズ語話者の分布でもわかるように、混住化の進展にもかかわらず、地域分化が根強く残存している地域も少なからずある。例えば、ガワー半島西部地域では、サービスクラスの人口とウェールズ語話者の割合がともに高く、新住民の文化的特性と旧住民の文化的特性が衝突(コンフリクト)していることがわかる。そのようなコンフリクトがみられる地区の1つに、本研究が対象地域としたスランマドック村がある。スランマドック村では旧住民と新住民との対立や隔絶を和らげる、あるいは解消する中枢的施設(central establishment)としてコミュニティビジネスを始めた。以下では、コミュニティビジネスの成立・発展とともに地域コミュニティがどのように変容したのかを検討する。さらに、コミュニティの変容が観光地化にどのように貢献したのかも合わせて検討する。

#### IV. スランマドック村における地域コミュニティの変容

近年、地域が抱える問題を地域住民が中心となって

解決していく方策として、コミュニティビジネスを立ち上げる例が世界中の国々で見られる。経済産業省関東経済産業局によるとコミュニティビジネスとは、「地域資源を活かしながら地域課題の解決を「ビジネス」の手法で取り組むものであり、地域の人材やノウハウ、施設、資金を活用することにより、地域における新たな創業や雇用の創出、働きがい、生きがいを生み出し、地域コミュニティの活性化に寄与するもの」であるとしている。つまり、コミュニティビジネスとは住民がビジネス主体となり運営を行うことで自らの地域の課題を解決し、さらに地域の経済的・社会的な活性化を目指すものである。

ウェールズでは1960年代より、商業サービスや社会サービスの衰退、いわゆるデブライベーション (Cloke et al 1997) が大きな問題となってきた。それらの地域的な課題を解決する手段として、コミュニティビジネスが注目されてきた。例えば、デンビーシャーのスランアルモン・イン・イアル村やレクサムミネラ村では、閉店していたパブを住民が買い取り、住民自ら経営を行っている。また、カマーゼンシャーのドリスリン村では、郵便局と食料雑貨店を維持するために住民がNPOを立ち上げ、自らボランティアとして勤務するという例もみられる。このようなコミュニティビジネスの取り組みは、単なる経済的な効果を生み出すだけでなく、地域の雇用創出や高齢者の生きがい創出、コミュニティ活動の活性化といった経済面では計測できない側面の活性化にも役立っている。

スランマドック村(写真1)における地域的な課題は人口の流入にともなうジェントリフィケーションの発展によって、コミュニティが二分化する傾向にあることである。つまり、旧住民と新住民の対立や隔離の構図が明確になっていることである。また、新住民の



写真1 ガワー半島スランマドック村  
(2013年9月筆者撮影)

セカンドハウスが増加することにより、住民が常駐しないゴーストビレッジ化も目立つようになり、それは農村景観の劣化にもつながっている。また、スランマドック村は近隣中心地までのバスの本数の減少や商業施設の不足といったデブライベーションの問題も抱えていた。これらの地域的な課題を解決するため、コミュニティビジネスが近年展開するようになった。ここでは、スランマドック村でのコミュニティビジネスとしてのコミュニティショップの展開を検討し、コミュニティショップの経営協力を通じて地域コミュニティがどのように変容したのかを明らかにする。

スランマドック村のコミュニティショップ開設の発端は、郵便局兼食料雑貨店が2004年に閉店したことにある。当時、スランマドック村の商店はその食料雑貨店のみであり、食料雑貨店の閉店は村の商業サービス自体の廃止を意味していた。そのため、商業サービス廃止に危機感を抱いた住民が中心となり、新たな食料雑貨店の開業に向けてのプロジェクトが始動した。彼らは幾度もの会議を重ね、住民自ら株主となることで開業資金を集め、生活協同組合として経営していくことが決定された。つまり、コミュニティビジネスの形態をとることで、地域住民を巻き込みながら食料雑貨店を再び開業し、それを維持していくことが目指されたのである。そのプロジェクトは、新住民や旧住民を含めた他の住民たちにも受け入れられ、全住民の98%が株主となり、約6,000ポンドの資金が得られた。また、Wales Co-operative Centreの協力により、地域のコミュニティビジネスはポストオフィスやウェールズ政府からの助成金も得ることができた。店の建物は住民個人が所有していた納屋を借り受け、2007年に村のコミュニティショップとして開業にこぎつけた。

コミュニティショップでは、地産地消やフェアトレ



写真2 スランマドック村のコミュニティショップにおける店内の様子  
(2013年9月筆者撮影)





写真 3 スランマドック村のコミュニティショップに併設されたカフェ

(2013 年 9 月筆者撮影)



写真 4 スランマドック村におけるコミュニティショップ

(2013 年 9 月筆者撮影)

ードを心がけた品揃えを目指しており、スランマドック村をはじめとして主にガワー半島で産出された野菜や食肉が陳列されている（写真2）。また、村の住民手作りのケーキやお菓子や工芸品なども販売されている。それらのケーキやお菓子は、併設されたカフェで味わうことができる（写真3）。カフェは、ガワー半島のトレッキングを楽しむ観光客のみならず、地元の住民たちも利用する憩いや談笑の場ともなっている。コミュニティショップの従業員は、すべて住民による無償ボランティアであり、約30人が交替で勤務している。そのため、コミュニティショップでの計上された利益は、運営費を除いてすべて基金化され、村の事業に利用されている。

2013年にはウェールズ政府とスウォンジー市からの助成金により、新築の店舗に移転した（写真4）。新店舗には車いす対応のスロープやトイレが設置され、バリアフリー化が図られたほか、駐車スペースの拡充も図られた。また、2階にはコミュニティスペースが

設けられ、住民の会合やクラブ活動に利用されている。カフェスペースもガワー半島の自然資源として重要な干潟に面して設けられており、その景観を眺めながらティータイムを楽しむことができるようになった。観光客にとっては、スランマドック村の雰囲気を楽しむことのできる観光資源としてのカフェである一方で、地元の住民たちにとっては買い物のついでに立ち寄り、世間話をするいわば「井戸端」のような役割を持つカフェとなっている。

筆者らの聞き取りによれば、「地元の人たちだけではなく、観光客と触れ合えるのが楽しい」、「みんなに会えるから、ほぼ毎日来ている」などという発言が多く、地元の住民の人たちから聞かれた。つまり、人とのコミュニケーションを楽しみとして地元住民はカフェを利用しているのである。そして、カフェでは地元住民と観光客とが触れ合い、自然に地元住民が観光客にとってのインタプリターとしての役割を担えるようになっているのである。このように、スランマドック村のコミュニティショップには住民が集まるような仕掛けが組み込まれている。

スランマドック村においてコミュニティショップは、地域が抱える地域コミュニティの二分化やフード・デザート、およびデプライベーションや高齢化といった問題を住民自らが経営に携わることによって解決するように機能している。さらに、単なる商店としての役割だけではなく、住民たちが気軽に集まることのできるコミュニティのハブ（中心）としての役割をも担っている。つまり、スランマドック村におけるコミュニティショップは、地域問題の解法を促すコミュニティビジネスの典型的な成功事例であるといえる。

スランマドック村にはコミュニティショップの他にもコミュニティビジネスが存在している。それは、地元の女性たちが立ちあげた土産店である。4月のイースターから10月までの土曜日のみ開店するこの土産店では、主に近隣の住民やアーティストが制作した工芸品を販売している。開店日が極めて少ないのにも関わらず、近隣やイングランドからの観光客が多く訪れている。また、コミュニティビジネスと関連して、宿泊施設（B&Bが2軒、コテージ8軒）も開業し、観光客の宿泊利用も増加している。このような観光客の多くが飲食や買い物でコミュニティショップを利用して、宿泊施設とコミュニティショップとの連携もうまくとれるようになった。

以上に述べてきたように、スランマドック村をはじめ

めとするガワー半島の農村では、都市からの人口流入の傾向が近年強くなっている。このような人口流入は、一般に従来の旧住民と流入してきた新住民との間に対立や隔絶などのコンフリクトの構造を生みだし、ついには地域コミュニティの二分化によって既存のコミュニティの破壊につながるものとなっている。また、観光地や余暇空間としての整備や発展にともない、農家の納屋や空家を利用した週末滞在者向けのコテージやセカンドハウスが数多く立地するようになってきている。しかし、コテージやセカンドハウスの増加は、農村の過疎化につながるだけでなく、農村の集落としての機能を著しく疲弊させ、コミュニティの存続に大きな影響を及ぼすことになる。つまり、このようなコミュニティのデプライベーションの要素がスランマドック村には十分に存在していたといえる。しかし、スランマドック村においてはコミュニティショップの存在がそのようなデプライベーションを軽減させる役割を担っているといえる。つまり、コミュニティショップは旧住民コミュニティと新住民コミュニティの繋ぎ手と機能し、それぞれのコミュニティの社会属性やライフスタイル、および文化属性や居住景観を融合させ、地域コミュニティの二分化を抑制する働きをもっている（図5）。

スランマドック村におけるコミュニティビジネスの発展によって、地域コミュニティはさまざまに変容した。先にも述べたように、村には8軒のコテージと2軒のB&Bが立地し、それらのほかにパブや土産品を扱う雑貨店もそれぞれ1軒ずつ立地するようになった。これらの宿泊施設や商業施設は、コミュニティビジネスの波及効果によるものであり、コミュニティビジネスとの連携も密にとられ顧客を融通しているため、経営の持続性は確かなものになっている。村のイベントとしても、毎年7月に農家や民家の庭を一般に開放するオープンガーデンが旧住民のコミュニティと新住民のコミュニティが協力して開催されている（写真5）。開催日には、村のそれぞれのオープンガーデンや商業施設を巡回するバスも運行され、普段は閑静な小村も賑わいをみている。このように、コミュニティビジネス事業やコミュニティショップの発展によって、スランマドック村の地域コミュニティは、コミュニティの一体化の方向で変容し、そのことは村の観光地化にプラスの要因となって、さまざまなイベントの成功につながっている。

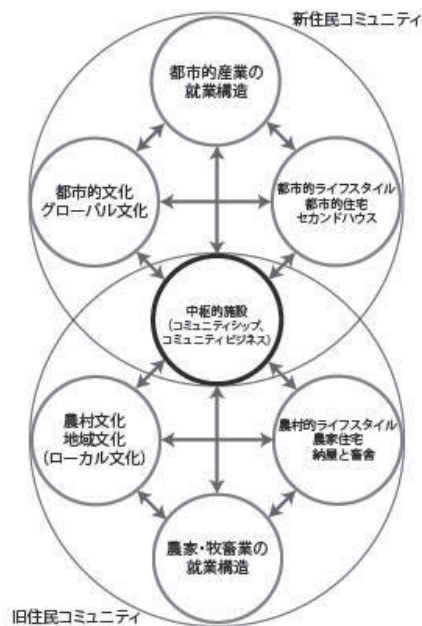


図5 旧住民コミュニティと新住民コミュニティとの融和・共生モデル



写真5 スランマドック村におけるオープンガーデン参加民家の庭の入口にオープンガーデンのグランプリ受賞のモニュメントが建てられている

(2013年9月筆者撮影)

## V. おわりに

本研究は、ウェールズ・ガワー半島とその1つの農村であるスランマドック村を事例にして、イギリス農村地域における人口流入の現状を俯瞰し、新住民と旧住民との混住化にともなう農村社会の変容を明らかにするとともに、新住民と旧住民との衝突や対立（コンフリクト）を和らたり解消したりする手段としてのコミュニティビジネスの役割を検討した。ガワー半島は高速道路の整備と相まって、ウェールズやイングランドの都市域との近接性が高まり、新住民の農村地域への流入が顕著にみられるようになった。このような新住民の流入ではガワー半島の良好な自然環境や景観が主要な吸引力となっており、そのような地域資源の開

発や有無が新住民の割合の地域的差異を生みだしている。つまり、ガワー半島の混住化は進展する南部とあまり進まない北部とに地域分化している。これは、干潟や湿地帯が広がる北部の地形条件と、良好な自然環境や景観が広がる南部との地域的差異を反映したものとなっている。

ガワー半島において、流入する新住民の多くは管理職や専門職など高度な都市的産業に従事する人びとであり、伝統的な農業や牧畜業に従事する旧住民と社会階層を異にしている。加えて、新住民の多くはウェールズ語を理解できない人びとであり、ウェールズ語教育を受け日常的にウェールズ語に触れる機会が多い旧住民と文化的属性も異にしている。これらのような社会階層や文化属性の差異は、旧住民と流入してきた新住民との間にコンフリクトや隔絶・分離などの構造を生みだし、ついには地域コミュニティの二分化によって農村社会の破壊につながることも少なくない。また、新住民の増加にともない、別荘や週末滞在型のコテージが多くなり、過疎化や農村機能の低下（デブライベーション）がガワー半島の農村地域でも顕在化するようになってきている。

農村地域の混住化にともなって、さまざまな問題が顕在化しているガワー半島において、スランマドック村の取り組みは画期的であり、他の農村社会のモデルにもなっている。スランマドック村では旧住民と新住民が協働してコミュニティビジネスを行うようになり、その取り組みの1つとしてコミュニティショップを運営している。コミュニティショップは農村の商業機能を補完するだけでなく、地域の農産物や加工品、あるいは工芸品を販売し、観光目的の来訪者へのサービスを提供する場にもなっている。また、コミュニティショップに併設されたカフェは、旧住民と新住民が集い、情報交換や交流の場としても機能している。つまり、コミュニティショップなどのコミュニティビジネスは農村社会のデブライベーションを軽減させる働きを担っており、旧住民と新住民のコミュニティの社会階層やライフスタイル、および文化属性や居住景観を融合させている。

コミュニティビジネスの発展にともなう、農村社会の変容は「住んでよし、来てよし」の地域づくりの一体的な風潮を生みだし、そのことが農村地域の内発的な観光地化の素地になっている。旧住民と新住民が協働で行う地域イベントは、本来、地域住民が楽しむものであったが、いつしか観光で来訪する者も楽しむものになった。このような混住化農村の観光地化を内発

的なものとして支えてきたのは、対立したり分裂したりする傾向にある2つの地域コミュニティを繋げる中枢機関としてのコミュニティビジネスやコミュニティショップであった。先進国において、農村地域の混住化は遅かれ早かれ避けられない状況である。混住化した農村社会の諸問題を解決する手段として、本研究は旧住民と新住民のコミュニティの繋ぎ手としての中枢的機関の存在を確認した。特に、ウェールズのガワー半島を事例とした本研究では、コミュニティビジネスが異なるコミュニティの繋ぎ手となる中枢的機関として重要であることを明らかにした。

#### 注

1) Office for National Statistics, 2011 Census: Aggregate data (England and Wales)

2) About Swansea; <http://www.swansea.gov.uk/keyfacts> (アクセス日 2015.11.17)

#### 参考文献

- Berry, B.J.L. 1976. The counterurbanization process: urban American since 1970. In Berry, B.J.L. (eds.) 1976. Urbanization and counterurbanization. Urban Affairs Annual Review, 11, Sage Publications: 17-30.
- Bourdieu, P. 1984. Distinction: A Social Critique of the Judgement of the Taste. Routledge.
- Brown, D. and Wardwell, J. 1980. New directions in urban- rural migration. Academic Press.
- Cloke, P. Goodwin, M. and Milbourne, P. 1998. Cultural change and conflict in rural Wales: competing constructions of identity. Environment and Planning A 30 (3): 463-480. Cloke, P. and Little, J. 1990. The rural state? Limits to planning in rural society. Oxford University Press.
- Cloke, P. and Thrift, N. 1987. Intra-class conflict in rural areas. Journal of Rural Studies 3 (4): 321-332.
- Klaus, E. 1993. The New Politics of Class: Social Movements and Cultural Dynamics in Advanced Societies. SAGE Publications.
- Little, J and Austin, P. 1996. Women and rural idyll. Journal of Rural Studies 12 (2): 101-111.
- Matthews, H., Taylor, M., Sherwood, K., Tucker, F. and Limb, M. 2000. Growing-up in the countryside: children and the rural idyll. Journal of Rural Studies 16 (2): 141- 153.
- Pacione, M. 1984. Rural Geography. Harper and Row.
- Phillips, M. 1993. Rural gentrification and class colonization. Journal of Rural Studies 9 (2): 123-140.